



「地域経済活性化を通じた面的支援」に関する調査研究

地域資源・観光等を活用した地域経済活性化事例

テーマ：C.地域活性化ビジネスの創出

事例  
C-④

沖縄県・読谷村商工会

商工会によるキーパーソンの育成とむらおこし事業の創出

(平成27年11月取材)

1. 面的支援の概要

(1) 活動・支援のきっかけ

① 地域の状況

沖縄本島の中西部に位置する読谷村（よみたんそん）は、東シナ海に面し、自然のままのサンゴ礁の海岸が美しい村で、日本一人口の多い「村」として知られている。

村内に、平成5年放映のNHK大河ドラマ「琉球の風」のオープンセットが作られ、撮影後にテーマパーク「南海王国・琉球の風」となっていたが、年々来場者が減少し、営業見直しを余儀なくされていた。運営会社から相談を受けた村と読谷村商工会は、1年にわたる検討の結果、新たに運営会社を設立して施設等を継承し、再出発を図ることになった。

② 体験王国「むら咲むら」設立の経緯

計画は商工会を中心に進められ、平成11年3月に同パークは営業を停止、村への無償譲渡を経て8月に体験型リゾート施設「むら咲むら」として再オープンを果たした。運営は同年5月に商工会員らが設立した「株式会社 読谷ククルリゾート沖縄」（以下、読谷ククルリゾート）が担い現在に至っている。

同社は11月に増資し、現在では商工会会員や地主、役場職員、後述するむらおこし塾生など総勢59名が出資するむらおこし会社となった。当初施設の運営管理は、商工会を介して村からの無償貸付であったが、平成22年に読谷ククルリゾートに有償譲渡され、現在は同社の所有・管理となっている。

「むら咲むら」は、その体験型メニューが好評を博し、修学旅行のコースに組み入れられる等多くの観光客を集めている。また、レストランは地元住民の利用も多く、村の活性化に大いに貢献している。

(2) 支援概略と特徴

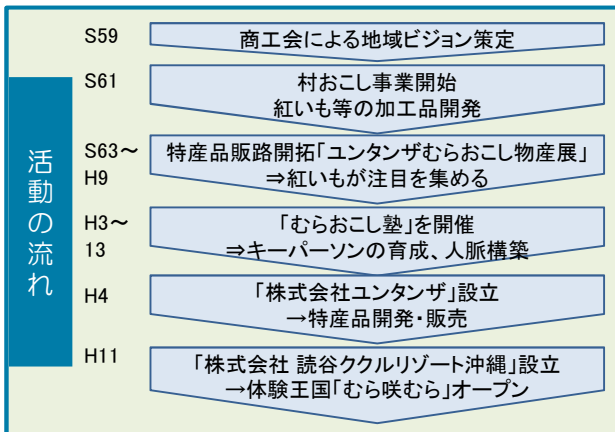
① むらおこし活動の経緯

商工会による活動は、昭和の時代まで遡る。①紅いも等を活用した特産品開発と、②人材育成を両輪として進められた。人材育成の成果の一つとして「むら咲むら」がある。商工会主催の塾の卒業生が読谷ククルリゾートの代表を務めたり村長に就任したりと、後のむらおこしのキーパーソンを輩出するとともに、官民ネットワークの基礎を作った。

- ・昭和59年度：地域ビジョン策定。観光や特産品開発等村おこしの将来像についてのビジョンを提示。
- ・昭和61年度：村おこし事業開始。JAとも連携して、後にヒット商品となる紅いもの加工品等を開発した。
- ・昭和63年：特産品の販路開拓を推進。以後10年間開催した「コンタンザむらおこし物産展」スタート。「紅いもシンポジウム」でマスコミの注目を集める。
- 地域づくりの担い手の人材育成と組織作り
- ・平成3年～13年度：毎年「むらおこし塾」を開催。⇒8期150名余の卒業生を輩出。研修やイベントの企画運営等を行い、むらおこしを実践した。塾の第1期生には現村長や読谷ククルリゾートの国吉代表が含まれ、後の「むら咲むら」の構想も話し合われた。
- ・平成4年：商工会会員等によるむらおこし会社「株式会社コンタンザ」設立。特産品開発や販売の核組織に。
- ・平成11年：「株式会社 読谷ククルリゾート沖縄」設立。「むら咲むら」オープン。

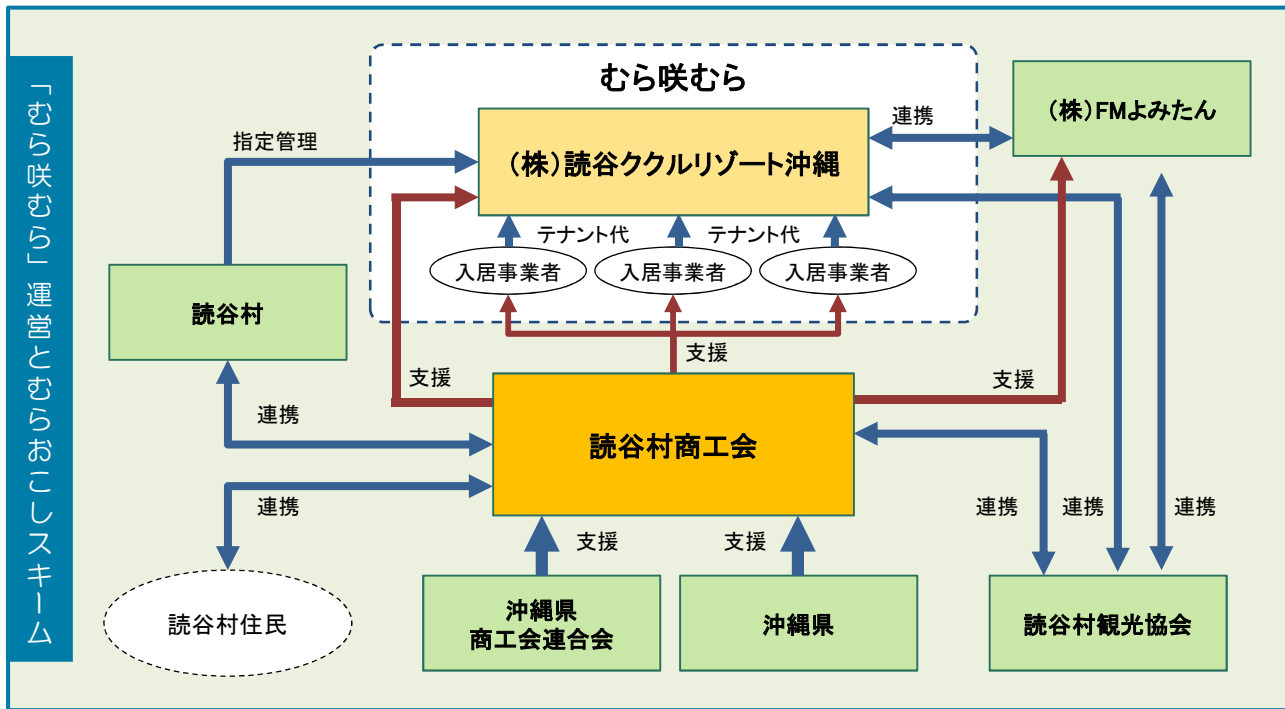
② 活動の特徴

商工会が地域おこしの核を担っている点が大きな特徴である。昭和後期に、自治体ではなく商工会が地域ビジョンを策定した先見性も見逃せない。また地域活性化のための人づくりから取り組み、長い期間をかけてキーパーソンを育成した結果が、今日の読谷村活性化のベースを築いたことは間違いない。



体験王国「むら咲むら」のエンタランス(左上)と敷地内施設の「天使館」(右上)。15世紀の琉球王国の町並みを再現した敷地内には32の工房があり、シーサー作りや琉球藍染、空手体験など101の体験メニューが楽しめる。平成22年にはホテルが完成し(右)、【体験・飲食・物販・宿泊】の4ゾーンが揃った。

## 2. 支援組織・地域内連携スキーム



### (1) 「むら咲むら」運営と特産品開発

「むら咲むら」は「株式会社 読谷クルリゾート沖縄」が運営しているが、新たなイベント等むらおこし事業を興す際には、商工会や村、観光協会、卒塾生が興した放送局「株式会社 FMよみたん」など、地域の主要機関が連携して進める。その際には、商工会が中心となって企画を立て施策を活用して事業を実施する事も多い。商工会では、関係者の調整を行うと同時に、会員企業や住民の協力を取付けるなど、全体のまとめ役を担っている。

その他特産品開発に関しては、商工会が生産者、JAや漁業、加工会社等と連携して進めている。

### (2) 工房の参画の仕組み

現在「むら咲むら」には32の工房が入っている。入居事業者（工房）は売上の20～30%をテナント代として読谷クルリゾートに払う仕組みである。体験観光を目玉とする「むら咲むら」では、入居事業者には体験メニューの提供が求められる。観光客が琉球文化などに触れることができると同時に、事業者側では伝統工芸等の工房の確保ができる。ただし、各工房の集客に関しては自助努力が求められる。事業者は、顧客を惹きつける工夫を重ねる努力が欠かせず、事業者のやる気を促す仕組みともなっている。



「株式会社 読谷クルリゾート沖縄」の國吉代表(右)と、「むら咲むら」を支援する読谷村商工会の比嘉事務局長。國吉代表は、「むらおこし塾」の第1期生で、「むら咲むら」の事業モデルを策定し、異業種から観光施設運営という異分野へ飛び込んだ。商工会の現会長でもある。



体験手造り黒糖作りメニューを提供する「沖縄クニダ物産」の宮城副代表。15年間むら咲むらにし出店している。体験メニューも、観光客のニーズに合わせて工夫を重ねることが重要と言う。



漆喰シーサー作りが体験ができる「手作り工房 ひで房」の比嘉代表と工房風景(下)。同工房にはファンも多く、2～3回通ってくるリピーターも増えていると言う。息子さんが後を継ぎ、2店舗目を展開中である。



## 沖縄県・読谷村商工会

## 商工会によるキーパーソンの育成とむらおこし事業の創出

## 3 成果・地域への影響

## ① 読谷村の経済活性化

「むら咲むら」の入場者数は順調に増加を続け、平成26年度には、修学旅行生7万人を含む23万人が来場した。敷地の外にあるレストランと合わせると、年間30万人の集客力を誇るという。「むら咲むら」入場料だけでも6千万円を超える経済効果である。加えて、周辺の宿泊施設や飲食店などへの波及効果も見逃せない。

また、雇用に与える影響も大きく、施設内や関連事業などを合わせて200名の雇用を生み出し、村の活性化の核事業となっている。

## ② むらおこしの起業促進、事業者の成長

卒業生の起業などで、今まで4社が創業した。いずれもむらおこしを念頭においた事業を展開する会社である。また、既存事業者の成長をもたらしたことも大きな成果である。前述した紅いも特産品の開発会社は、年商50億円、400名の従業員を抱える大企業へと発展した。「むら咲むら」への入店

事業者も、家族経営の工房であったのが今やスタッフを抱え他の店舗を展開するまでになった事業者もいる。一連の活動によって地域が活性化することで、理想的な域内経済循環が図られている。

## ③ むらおこしのキーパーソンの育成

最大の成果は、むらおこしに欠かせないキーパーソンの育成と連携関係の構築であったと言える。将来を見据えて「むらおこし塾」という種を蒔いたことが、10年近くの時をかけて実を結び、今の読谷村の活力の下地を創った。人材がそれぞれの場で活躍し【役場+商工会】の関係が強化されたことが、村全体で取り組む活動に繋がっている。



修学旅行の学生で賑う「むら咲むら」内の体験工房(左)と敷地外にある読谷物産館(右)。物産館も読谷ククルリゾートが経営している。また、同建物にはレストランもあり、地元の利用客も多い。



「よみたん夜あかりプロジェクト～琉球ランタンフェスティバル」での夜景。夕方以降の読谷村の滞在を促す仕掛けとして今年から始まった。

## 4 今後の計画

## ① 夜の新しいイベント開始

商工会の支援で、12月に新たな観光イベント「よみたん夜あかりプロジェクト～琉球ランタンフェスティバル」が始まった。「むら咲むら」でランタンを灯して屋台を出し、カップルや近隣住民など新たな層に夜景を楽しんでもらう企画である。本事業は、県の補助金を活用し、商工会が読谷ククルリゾートや村、観光協会、FMよみたんと連携体を組んで実施し、話題を呼んで初日は500人の人出を集めた。

## ② 商売の神様「泰期」をテーマにした観光振興

比嘉事務局長は、平成25年度から、14世紀に琉球初の中国使節団長を務め、東南アジアに及び大交易圏を築いた商売の神様・泰期(たいき)をテーマにした観光振興を進めているところである。「むら咲むら」にきた観光客を他の名所にも誘導したいという考えからである。泰期に関連した特産品やメニュー、泰期像のある残波美岬への観光ルートを開発し、より広い経済効果を生みたいと考えている。

## 5 地域経済活性化のポイント・商工会(指導員)の役割

## 【ポイント】

- ① 商工会が「地域ビジョン」を策定し、特産品開発や、観光開発、地場産業振興などに関する将来ビジョンを抱きながら活動を進めた。ビジョンがあったために活動の芯がぶれずに、事務局長が交代しても活動が継続されている。
- ② 「人の育成」に着目した。地域振興においては、中・長期的な視点は不可欠だが、10年スパンでの活動はなかなかできるものではない。本事例では町の協力も得ながら、「むらおこし塾」の開催によって人材育成を行い、10年をかけて事業化を実現させている。
- ③ 育成された人材が、塾で学んだ事やその時作ったネットワークを活かして、むらおこしのエンジンとなっている。

## 【商工会(指導員)の役割】

- ① 「地域ビジョン」策定により、将来の構想を提示した。
- ② 将来のキーパーソンとなり得る人材を巻き込んで育成した。
- ③ 商工会をハブとして、自治体や観光協会、JAや漁協などの機関と事業者や住民を結びつけ、むらおこしのネットワークを構築した。